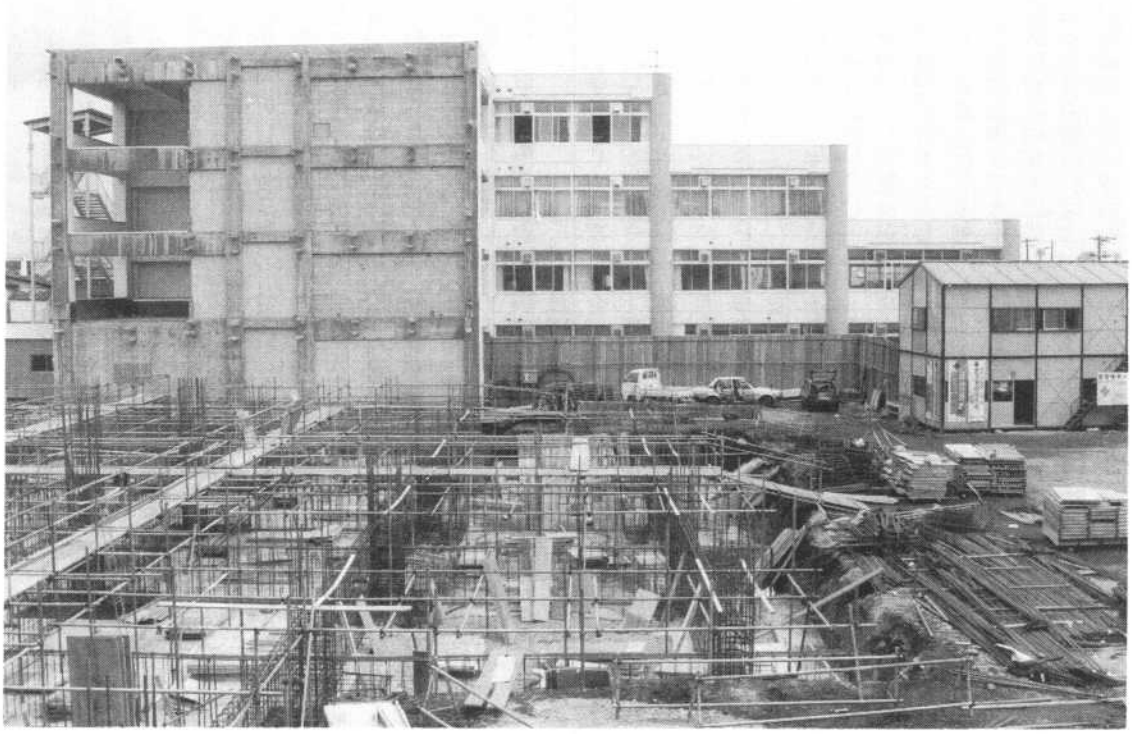
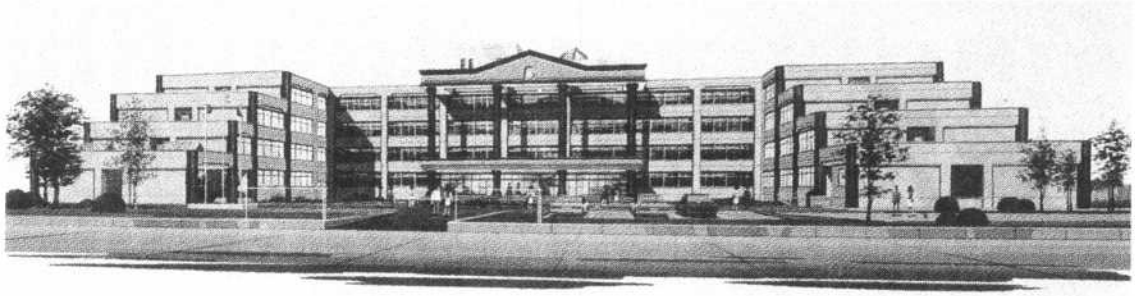
東京白楊だより

第14号
3.9.20

窮みなし流転の相 …… 学校長 堂高栄治
函館想望② …… 支部長 篠田作衛
母校新校舎建築第二期工事に入る
〔シベリア物語〕長谷川四郎の紹介
第15回親睦大会 …… 特別講演 山村昭七郎





白楊ケ丘同窓会東京支部
旧制函館中学校
函館中部高等学校

窮みなし流転の相

学校長　堂高　栄治

来年の三月で教職生活三十七年の務めを終えて定年退職することとなった。健康に恵れたおかげで長期勤務の時の流れの実感いまだしない。しかし、昭和六年生れ、所謂、昭和の激動太平洋戦争の激化の中で育ち、戦後の世相混乱時に学び、日本の独立安定ならぬ昭和三十年、高校の教壇に立ったのだがあまりの早さにまさに「光陰矢の如し」の感するのみである。二十八才から三十九才までの十一年間、函中の教諭として勤め、五十一才から五十四才までの三年間再び函中の教頭、そして三度目五十八才から定年までの二年間、合計十六年間お世話になった。とりわけ最後を勤めあげる函館中部高校で教職の終焉を迎え得ること顧みて幸せであったとしみじみ、教師冥利に尽きるものとかみしめて、思いひとしおである。何よりも大過なくピリオドを打てること誠に幸甚の外なく、同窓会の皆さまに心から敬意と感謝の意を表する次第である。

ところで、東京支部北原氏から〝東京白楊だより〟の原稿依頼をうけて何を書こうかと迷ったが、表題のようなことになった。

入学式の式辞より

うららかな春の陽光をうけ、森羅万象の鼓舞する季節、ご入学おめでとう。

入学式に当たり、一言所懐を述べさせていただく。……中部高校に入学したということは、人生の第一段階を登ったことになるがその陰には教え、励まし、育くんでくれた方々が大勢いる筈である。先ずはご両親を初めその方々への感謝の心を忘れてはなりません。そして今日からは、先輩もそうであったように、先人の求めたところを求め、先輩の残した形だけを追うのではなく、先輩の求めた根本の心をさぐらなければならない。先人がそれぞれ純粋に求めたものを、思いを凝らして求めゆく過程の中にのみ真実はある。志を高く、自らを鍛える決意を新たにしようではないか

函館中部高校は旧制中学校として開校して、通算九十六周年となる。四年後百周年という大きな節目を迎える。校舎も改築中であるがなによりも新しい皮袋に由来の〝白楊魂〟の継承入魂に全力を注ぎましょう。

函中は創立以来、戦前の五十年、戦後の半世紀にわたる歴史のなかで、心は常に伸びやかで自由の境地、そして高きを求めてやまない文武両道をモットーとして発展しつゞけてきた。先輩には「勉強と部活動の両立なんて特に意識して考えたことはない。部活動をするのは当然だと思ったからやり通した。勉強は計画を規則的にしかも集中的にやった。受験勉強は部活で鍛えた体力がものをいうし、集中力では部活で養われたものを生かした。」と体験を淡々と語る東大現役合格の生徒がいた。……高校生活は主体的な生き方のバランスがいかに大切かを物語っている。もう一つ極めて大事なことがある。函中に入学して友との新しい出会いがある。どんな人物を友にできるか、それが長い人生を決定づけるといっても過言でない。

俳人、正岡子規は二十代のころ自分の友を数えあげて、次のように名づけている。「愛友、良友、好友、敬友、益友、厳友、文友、畏友、郷友、親友、温友など二十ほどあげ、第一等の友は、正直で学識のある人。第二等は学識はなくとも正直で淡泊な人、第三等は学力優秀でも利己的で思いやりのない人、と分類。

「第一等の友ばかりならいうことはないがなかなか得がたい。第二等の友であれば十分であろう。たゞ第三等の友であれば、そのような人たちとはあまり付き合いたくない。」と子規はいっている。

子規は大学時代に親交を深めた相手に夏目漱石がいる。残された多くの手紙から二人の裸の付き合いが偲ばれているがちなみに子規の分類によれば漱石は「畏友」、最も尊敬している第一等の友に入るといわれている。

友の在り方として、自分の人格と品性を高める戒めとして心にしよう。……略。

（第27代学校長　於校長室）

随　想

「函館想望」(2)

東京支部長　篠田　作衛

昨年、この同窓会報に、標記のささやかな随想を掲載した所、意外に多くの方からコメントを頂き、嬉しい思いを重ねた。同窓生というだけで、すぐ心が結びつくことを、改めて実感した。これらの方々に心からの謝意を捧げたい。

その頂いた意見を集約すれば、私と同じように、故郷函館は美しいイメージの街だが、それだけに甘えないで、情報化、ハイテク、感性ビジネス、国際化などの進んでいる今日、これらに呼応して活性化と発展を遂げて欲しい、そのためにどうすべきか、更に一緒に考えよう、といった趣旨のものが多かった。

加えて又、昨年暮の頃、「日刊政経情報」と称する地元函館の政治経済の専門誌にこの拙文が紹介された。それは「欲しい都市構想の青写真」と題する社説（命題と名づけたコラム）の名で、縷々拙文の引用とコメントを交えながら函館の将来像を提起されたもので、共感の思い深く、心から恐縮した。よもや地元有力誌の主筆の眼にとまり、プロの視線の洗礼を受けようとは考えてもいなかったので、光栄この上なく、これだけで、期待した「呼び水」の役割を果しおおせたとの安堵の思いをも深くした。

ともあれ、折角多くのご意見を頂いたので、それに応える形で、いま少しわが故郷についての思いを展開してみたい。以下は、その「日刊政経情報」の91年夏季特集号に寄せたものと略々同文であるが、東京在住の同窓の諸兄によせる気持と全く共通するので、敢てその儘記載させて頂くことする。

標記「函館想望」の内容について、賛意も種々頂いたが、素直な批判もあり有り難かった。その批判的意見には大きく二つあった。

一つは、随想の中で提案した三つの具体策とも、かなり大規模なインフラ投資を伴い、貧困な函館市政にとっては架空に近く、少くも五十年、百年をかけて、気長に計画的に展開していくべきもの、それでも成否が怪しい。それより手近な文化活動、ソフト的な面に活を入れる方が手取り早く効率的ではないか、その面の考察も記述も足りないとの指摘である。

いま一つは、全体の記述が、快適な気候と花の香漂う短い夏に視点がおかれている。旅人は知らず、函館生れにしては、北海道の冬の厳しい生活や苦悩を忘却ないし無視した儘だ。だから考察が甘く、片寄っているといった意見であった。

何れも、小文の盲点を鋭く突いた指摘である。そこで、この正鵠を射た批判にフォーカスをあてながら、再び函館を想望してみよう。

第一は、ソフト面の発展と活性化を如何に刺戟し、現実に結びつけるかである。

実は、これらについて思いを廻らしていた矢先、最近二つの記事に接した。

一つは、最新の文芸春秋：91年6月号の特集記事「ゴルバチョフ訪日の宴のあと」と称するシリーズであり、今一つは前記「日刊政経情報」の5月24日号の社説「明日の函館をとくカギ」である。

奇異かも知れないが、この両記事が、私の心の中で、函館文化を刺激する具体策として結びつく。そのからくりは次の通りである。

文集の記事は、三編にわたる論文と対談記録から構成されているが、私の心に残ったキーワードは、「日ソ関係は、日米関係の関数」の一言である。端的にいうと、「日本にとり重要な国はあくまで米国」であり、「日米関係をうまくやって現在の繁栄を續ければ、領土問題もおのずと有利になる」。その意味で、「日ソ関係が日米の動向に影響される構造は変らない」、そして「日本の地位を向上させていくことこそ、北方領土が返って来る近道」というのが、論旨である。

異論もあろうが、私には「なるほど」と思われ、大筋として賛成できた。その上で、この論述を多少拡大して考察を加えたい。即ち「日ソ関係」を「環日本海」に、日米関係を「環太平洋」と読みかえれば、もう一段グローバルで次元の高い論議に昇華できると思う。

昨今急に環日本海構想が浮上し、ゴルバチョフ訪日が報道され始めた頃から、俄かに環日本海の経済の動きが活発になった。北陸三県、特に新潟県、市の意欲と活動は物凄い。

一方又、日本が政経の安定を維持しようとすれば、太平洋の対岸、米、加はもとより、濠、中、アセアンとの交流と互助を、より一層大事にせねばなるまい。詰まり、環太平洋、環日本海の双方ともが、わが国の生命線であり、サークルの仲間である。政経、文化、それに人間の交流や移住の問題に至るまで、同じ程度に重要に思われるのだ。

そこで思いついたことがある。因みに極く大まかに環太平洋と環日本海をイメージしながら、ラフな円形を世界地図上に描くときその両円の交差線上にのる地域、或はその接点はどこか。私は、日本広しといえども函館以外にあるまいと見る。即ち、函館の海は、太平洋と日本海の両方に開かれていて、両環海の一員であると共に、どちらにも的確な対応とつき合いを迫られる。いい直せば、その架橋となるべき地政学的運命を背負うものだ。

さなきだに地峡、海峡に望む地は、古今、地政上の要衝だが、函館は、青函トンネルが開通して以来、国内的には物心とも本州との一体性が具現できた。然し今後は、国際的にも両環海を繋ぐ責任と運命を背負うのである。

このことは、誰の眼にも明白である。今21世紀に向け世界がボーダレスをかざして驀進しようとするとき、或は冷戦が止み東西の交流が活発化しようとするとき、函館は新たな任務を追うことになる。その解くべき課題は極めて多岐にわたり、且つ難しい。

では、その任務と課題に対して何をなすべきか、何から着手すべきか。

そこで登場するのが、前記の社説「明日の函館をとくカギ」である。結論を要約すると、「子女教育を含めた幸福な家庭生活を送るためにも、函館の緊急な課題は、さしずめ大学の誘致である。教育機関が生まれれば、研究機関が生まれ、企業が張りつく。（中略）詰り函館にとって大事なのは、どう考えても大学ではないか。広中大学構想への市民の関心が高いのは、函館の明日を拓くカギだからである。」

正に至言である。だがその理念は、幸福な家庭の構築のためだけでなく、前述の国際責任を果すためには、全く共通する鍵とみて異論はあるまい。

広中大学は千載一遇のチャンスである。是非実現して欲しい。ただ残念ながら、その具体案を知らない私として、素朴な提案がある。

その構想の中に、外国語学部と体育学部の併設も企画願いたいとの一点である。仮に一挙には無理なら、逐次増設してもよい、又若し広中大学とどうしても馴染まないなら、別の組織、経営、キャンパスを考えるのも致し方あるまい。

何故、外語大（学部）と体育大（学部）か。

先ず外語大が生まれれば、それを核として、自ら国際化とボーダレスが進む。周知の通り、今EC統合を目前にして、英、佛、独、フラマン語の通ずるベネルクス三国や、独、佛双方を話すロレーヌ地方が急に活気づき脚光を浴び始めた。企業進出と催しが増えた由。

グローバル化への近道は、言語による意志疎通である。外語大を創るだけで国際都市になれるか疑問だか、播かぬ種は生えない。そこでこの外語大に英語科と露語科を最低限設置して、できるだけ多くの外国語を学び、それらに接する場としたい。

教師は原則として、母国人を招く。日本の昨今の給与水準と円高なら、招聘費は安く、校舎、衛星通信機器等以外の経費はあまり要らない。あとは住環境を整えて、各国教師と家族を混住させたら、自然と国際村ができる。

こうして外語大が核となり、米ソを中心とした人間と言語が行き交う街、函館が出現すれば、前記の地政学的必然性と風光明媚のたたずまいから見て、国際都市の実質と風貌を伴うこと必定に思われる。先ずこのことを銘記しておきたい。

次に、体育大を推奨したのも同じような発想と機縁に基づく。その理由は簡単である。1　スポーツこそ若人に対する

最大の引力であり、若さの象徴である。2　オリンピックが代表するように、体育も又ポーダレスの世界であり、時流に乗る。3　スポーツで存分に競争して、実力と自我を発揮し、憂さを発散できれば、人間は戦争による勝敗の決着を求めなくなるのではないか。仮にこの論理が甘いとしても、外語大との併存により国際親善に役立つこと必定であろう。4　外語大に似て、比較的安上りである。グランドと校舎と用具の他は、優れた指導者を招くため、住環境を整えればよい。5　道南は、長野県などに較べ海洋性気候ながら、陸上、海洋、夏季、冬季、平地、山岳等何れのスポーツの展開にも好適である。隣接する福島町は、近年、横綱を二人生んだ日本で唯一のまち、風土と食物が適しているのかも知れない。忘れないでおこう。

第二の課題。北海道の冬は長く厳しいが、本当に年間を通じて魅力と活性豊かな街にできるか。又どうすれば可能か。

結論からいえば、発想と努力次第で必ずや達成可能であり、その底力を充分に具備していると見る。以下に若干の考察と提案を試みる。

先ず、厳しい冬をどうして魅力に変えるか。確かに、多量の積雪と寒冷による活力と能率の低下、その心身の苦痛は、日夜現地で辛酸を舐めていなければ理解できまい。又よそ者は、つい見落してしまう。然し、物は考えようだ。例えば同じ欧州でも、スカンジナビア三国や独、英が、イタリヤ、スペイン、ポルトガル等の南欧諸国よりも文明が進み、所得も貯蓄も大きいのは何故だろう。一言でいえば、外界の或程度の厳しさこそ、真摯な労働と知能を刺激し、協力精神をも促しているからだと見る。高緯度地方の冬では、ホームレスは生存さえ許されない。一夜にして凍え死ぬ。逆に南欧では、美しい風景としゃれた文化の裏で、流浪の身でも生存が可能だ。詰まり、適度の外的な試練があってこそ、人間は文化文明を組織的に構築できるのだと思う。

現実に戻ろう。道南の当節の実際の悩みは、皮肉にも、積雪の不足にある由。札幌が毎年雪祭りや大倉山のジャンプで賑わっているのと較べ、明らかに後塵を拝している。そこで、具体策を一つ、二つ。

当今のハイテク時代には、良質の人工雪も簡単に得られる。即ちスキーに快適な粉雪を製造できるので、道南に多いゲレンデに、このハイテクの支援を得て、いつもスキーを愉しめる状況を作り、管理し、営業を展開するとよい。更にインドアドームを建設すれば、夏も可能になる。一年中遊べるとなれば、風景が優れ、食物がうまくて温泉も持つ道南への訪問客が、冬にも溢れることが約束されよう。

又、無責任な着想だが、函館西部の山裾の幾筋かの坂道にも、天然雪の不足のとき、何かの工夫を加えて、この人工雪を積らせたらどうだろう。子供の頃、弥生坂の上から電車通りまで、銘々が小橇を操り、「ヨコ」と称するはすに構えた乗り方で、片脚で舵をとり、「去れよ!」と叫びながら、傍若無人に一気にかけ下りた。当節の冬期オリンピックの華「リュージュ」に似ていて、その先駆だったような気さえする。又新雪が積る都度、夕食後でも、気軽に家からスキーをはめて、その辺の坂道で小さなクリスチャニアを愉しんだ。これからも冬の函館訪問者に、安いホテルや民宿を提供し、若い男女にナイタースキーを満喫して貰うのも一興かも知れない。

同様にスケートも工夫次第でもっと愉しめそうだ。最近、競輪場とスケート場が結合した由、流石に市行政のヒット作に思われるが、五稜郭の冬は今どうなっているのだろう。新技術を使えば、昔と同じく冬の半年間はリンクとして活用できそうに思う。

冬の函館の味覚は格別だ。魚種がいい。「そい」など、鯛ともふぐとも違う絶品である。冬のやりいかは、夏のいかそうめんの名で売出したまいか（或はするめいか）より更に一味上だ。夏冬を問わず、いかつけを体験ツアーに織込んだらどうだろう。他にも名物料理が沢山ある。ほっきもほたて貝も本来は冬から早春にかけての味の由。生鱈のこぶじめなども京都風に通ずるおつな味覚である。

西日本で有名なふぐ、まつば蟹、かき等、皆冬に商売している。本格的に冬の味と愉しさを売出せば、函館も必ず浮び上る。

次は、春と秋について考える順番が来た。

先ず春について思い当ることがある。北海道は北欧に似て、四月末頃から百花繚乱、一挙に天国到来の感がある。特に意識したいのは、桜の開花がゴールデンウィークと重なることだ。仮想に近いかも知れないが、臥牛山麓一帯に桜の苗木を育てたらどうだろう。並ぶ坂道の両側にもピンクの並木で縁どりしたら面白い。又昔、蓬来町から銀座（今もあるか）の辺りに柳が並んでいた。これも復活、拡張すれば、いにしえの歌人が詠んだように、「やなぎ桜をこきまぜて」臥牛山麓に駘蕩たる雰囲気が漂うに違いない。

飛行機の窓から眺めても、函館のまち中に緑の少ないのが気になる。

又六月に入る頃、年中行事だったリリー摘みの風情は今どこへ行ったのだろう。その頃、街頭にも白い花束の香りが流れていた。「鈴蘭摘み!」野趣とエレガンスが伴う。

遠い追憶を今度は秋に廻らすと、道南の紅葉は天下一品だと思う。気候と風土と樹種の関係だろう。関東の近くの紅葉は赤味が足りない。又京都以西は、そのピークが年末に近すぎて、気分が落着かない。

道南の秋の風情は、紅葉だけではない。幼い頃、栗拾いや茸狩りや山葡萄探しに出かけて、近くの山野に遊んだ。今だってその気になれば豊かな収穫があると聞いた。

要するに、函館とその近郊は一年中愉しいのだ。

やっぱり函館は素晴らしい故郷である。

世界平和の鍵を握る地政学的要地との認識、即ちロゴスの視点からみても、又四季色どり豊かな遊空間と把え、パトスの側面から眺めても、重なって人を呼ぶ魅惑の街だ。日本、いや世界的にも類い稀に思う。だから努力次第で、前途洋々としている。

重ねて、市民の自覚と智恵と協力とを切に念願し、蔭ながら、心からの声援を送る次第である。

母校新校舎建築工事
第二期工事に入る
―新校舎の使用も開始―

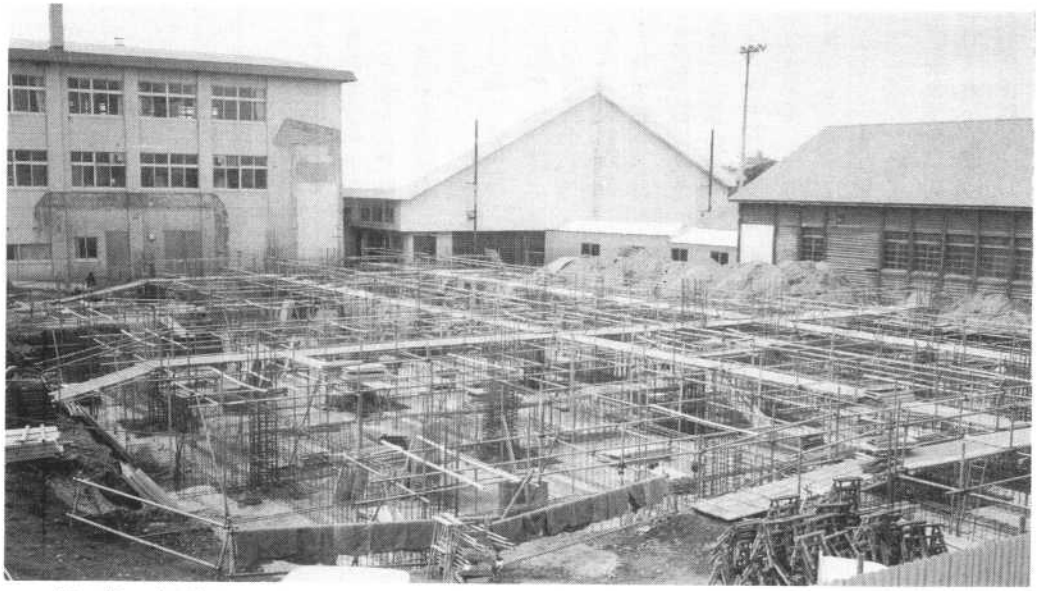
母校函館中部高等学校の校舎新築工事が、平成2年5月から始まったことは、前号でお知らせしたとおりである。

着工後、工事は順調に進み、第一期工事を終え、本年度は第二期工事に入っている。表紙の下の正面メイン部分の工事が始まったわけである。

第一期工事でできあがった校舎が、すっきりとした姿を現わし、3月末から新校舎の使用を開始した。

校舎全体の工事は、平成4年3月25日完成予定で、平成5年度にグランド、前庭、外構工事を終り、全て完成となる予定である。

写真は、表紙の下のパースの右側部分ができあがった姿である。ややわかりにくいが、薄い黒色になっている三本の柱が、「白楊の幹」を模した「円柱」である。



第二期工事現場。明治と昭和の新旧両体育館が見える。新校舎と旧校舎の通路と、家庭科調理室と生化学実験室とに、間仕切りされて使われている。両方とも、全校舎完成後に取りこされる。

白楊ケ丘同窓会東京支部
第十四回親睦大会

65期　菅原　大作

平成二年度の白楊ケ丘同窓会東京支部の「第十四回親睦大会」は、十月十七日（水）午後五時より、東京・港区南青山の「東京青山会館」で、来賓及び同窓生約百八十人が出席して行われた。

今回の親睦大会の特別企画は、北海道大学名誉教授の三浦祐晶氏に、高長寿社会が突入している現代をどう生きるかということに焦点を当て「健康に生きる」と題した講演をしていただいた。三浦氏は、昭和九年（第41期）に函中を卒業。北海道帝国大学（現北海道大学）医学部に進学。同大学を卒業後、教授、附属病院長、医学部長などを歴任されて、現在は同大学名誉教授。日本医学会幹事、北海道総合開発委員会委員などのほか、白楊ケ丘同窓会の札幌支部長としてもご活躍されている。

講演で、三浦氏は「函中に入学した昭和九年は、三月に函館大火があって小学校の卒業式ができず、中学生の制服を着て4月になってからの卒業式で、忘れられない思い出となっている。現在、年に二回、函中の同期会を行っているが、大変楽しい会である。同期生とはいえ、懐かしさを覚えるのは卒業後二十年程過ぎてからと思う。仲間との付き合いは年をとるにつれて懐かしく、また一層親しく

なる。そして、老人になるほど仲間との付き合いは生きがいの一つにもなる。その意味でも東京の同窓会では、若い人達を含めた仲間づくりを進めていただきたい。」と前置きして、概略次のようなお話しがあった。

「平成元年度のわが国の平均寿命は男七十六歳、女八十二歳で世界一である。しかし、一方では、働き盛りの人達の中に、今のような生活を続けていて平均寿命まで生きられるかという不安を持つ人が多い。病気ではないが、本当に自信を持って〝健康である〟と言う人は大変少なく、しかも、中高年から若年層にまでこうした状態の人達が広がっている。

一方、四十歳代も半ばを過ぎると、身体にはいろいろな異常、例えば老眼が始まって近くが見えにくくなったり、コレステロール値や血圧が高くなる。しかし、これらは老化に伴う現象で決して異常ではない。

人間は、生まれてから成長、成熟、退化、そして死という過程をたどる。成長は二十五歳までに終わり、眼の調節機能が落ちるのが四十五歳頃、頭髪が薄く、白くなる。しわ、シミ、脚が弱るなどが出てくる。これは万人に共通して起こる。血管も老化して固くなり、さらに食生活などの影響もあって血管の壁に脂肪がついて細くなる。このため、血圧も当然高くなり、血管が詰まったり、破れたりという結果起こる脳出血や脳梗塞、心筋梗塞などの危険性は年齢とともに増してくる。これらは生理的な現象であり、止めることはできない。したがって、健康に暮らすということはこうした生理的な老化を遅くすることが大切である。

生理的な予防のためには、睡眠、休息、運動、食事のバランスを若い時から保つ生活管理と健康チェックが大切である。睡眠は、最低一日七時間とり、就眠は十二時より前に。少なくとも一週間に二回は十一時前に寝る。肥満が問題だが、肥満の原因は早食い、間食、夜食、大食にあり、一日三食をバランスよく、朝食をしっかりと。また、運動は年齢によって異なるが摂取エネルギー量の十分の一がめやすとなる。どのようなスポーツでもよいが、一週間に最低二回三十分間以上は持続して行うこと。

睡眠と食事、運動について、イギリスの調査では、①毎日7時間の睡眠、②三食を時刻を正確に食べる、③朝食をしっかりと、④たばこを吸わない、⑤お酒を飲んでも良いが適量、⑥標準体重に、⑦週に二回適当な運動をするか、毎日4キロメートル歩く、この七項目のうち、六項目以上を守っている人は、四十五歳の人であれば後三十三年生きられる。三つしか守れない人は二十一年。さらに、七項目全部を守っている人と全く守らない人では、平均寿命の差は二十年あった。」と、健康で長生きをする秘訣を述べ、さらに「現在の日本人の平均寿命の数字には、寝たきりやボケの人も含まれる。しかし、寝たきりやボケでは長生きしたことにはならない。これからの時代は単に長く生きるかではなく、いかに健康に長く生きるかということにある。」と結ばれた。

三浦氏は、時に、ユーモアを交え、医学的な話を分かりやすく解説。聞く人に感銘を与えた。講演会場には、約八十人が出席、熱心に聴講した。

三浦氏の講演の後、会場を代えて六時より、大会と懇親会に入った。

大会は、第69期・高木隆氏、第75期、桑原洋子さんの司会のもとに始められ、最初に第52期・高橋良一氏が開会を宣言。次いで、支部長の第48期・篠田作衛氏が、「本日ご参集の方々は、東京地区を中心とするとはいえ、年齢や職業も千差万別で、活躍する場も様々と思われる。そこで、白楊ケ丘同窓会としては求心力を高め、同窓生の皆さんに役立つ情報を提供できるようにしたいと考えている。本日は、昔に思いを馳せ、大いに飲み、語り、楽しい一時を過ごしていただきたい。」とあいさつした。この後、出席者全員で同窓会歌（函館中学校校歌「玄冥の北の一道……」）を合唱。雰囲気を盛り上げた。

次いで、来賓として出席された堂高栄治函館中部高等学校長が「平成五年には、新校舎が完成する。また、平成七年には、創立百周年を迎える。百周年の記念事業として、〝函中百年誌〟の刊行を最重点にし、諸事業推進への準備に入った。九十周年の時には、函館在住者を中心に諸事業を計画、推進したが、百周年事業では全国の白楊ケ丘同窓会の会員の衆知を結集して進めたい。よろしくご協力いただきたい。」とあいさつした。

この後、同じく来賓として出席された高市道也函館市東京事務所長、佐藤弘明同副所長、三浦祐晶白楊ケ丘同窓会札幌支部長、近藤達也同函館支部長、加藤義夫同宮城県支部副会長、鈴木尊子白楊ケ丘同窓会副会長、柴田隆一同事務局長をそれぞれ紹介した。この中から、鈴木同窓会副会長が、藤岡敏彦同窓会長のメッセージを読み上げた。また、加藤宮城支部副会長が祝辞を述べられた。

さらに、木戸浦隆一函館市長より寄せられたメッセージを高市東京事務所長が読み上げて、大会セレモニーを終了。そして、第54期・杉田博子さんの音頭で乾杯し、懇親会にうつった。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館山からの夜景や函館市近郊の景観などをデザインした観光ポスターが多数貼られて、雰囲気を盛り上げた他、函館近郊の七飯町で作られた〝函館ワイン（市寄贈）〟などもあって、会場内は懐かしい函館弁であふれた。宴が最高に盛り上がった頃、ここ数年の恒例となっている寄贈品の抽選会に移ったが、今回は特に同窓会特別賞として北海道産のジャガイモを産地より自宅へ直送するという目玉商品が用意されたほか、約百五十点近くの洋酒やテレホンカード、書籍、雑貨などが準備された。会場内では、商品が当たるたびに歓声が上がった。

抽選会終了後、第43期の井筒吉彦氏が閉会のあいさつを述べ、さらに大会の最後を締めくくる函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約して、午後九時過ぎ終了、散会した。

元町マリンハウス

北海道函館中部高等学校 創立百周年協賛会 設立総会 開催

《募金目標 八千万円 決定》

母校は四年後の平成七年に創立百周年を迎えます。昨年からそのための準備が行われていましたが、ことし二月二十七日（水）、創立百周年記念協賛会の設立総会が母校会議室で開催されました。

設立総会には、同窓会本部・各支部の代表、学校の教職員、PTAの代表ら約百二十名が出席し、会則、会長以下の役員、事業予算の規模と項目が決定されました。

会則には、名称、目的、組織、事業、役員、諸会議、委員会、その他について九十周年のときと同様盛り込まれ、これにもとづいて、藤岡同窓会長が協賛会の会長に選ばれ、篠田東京支部長が他の支部長と共に副会長に就任しました。

予算規模は八千万円と決まり、記念式典などの行事の他に、記念事業として、記念史編集、同窓会名簿発行、施設設備整備、運動部や文化部の部室、記念碑新設等の記念事業に充当することになりました。

現在六つの委員会で検討していますが、何といっても注目を呼ぶのは、募金目標額が九十周年のときの約二倍の八千万円ということです。しかし、百周年といえば大きな節目です。一人でも多くの会員にお願いして、ぜひ目標額を達成したいものです。

募金方法などについては、決定次第支部や同期会からお知らせします。よろしくご協力くださるようお願いします。

年会費納入のお願い

当支部の運営は、会員の皆様に納入いただく年会費で、ほとんどが賄われております。

年々納入額が増えておりますことは、皆様のご理解とご協力の賜物と厚くお礼申し上げます。

本年も、「郵便振替用紙」を同送いたしましたので、年会費をお振込み下さいますようお願い申しあげます。

なお、10月8日開催予定の大会当日に、会場でお支払い下さっても結構です。

事務局からのお礼

前13号で、事務局にこの〝東京白楊だより〟の創刊号から第3号まで保存されていないので、篤志の方の寄贈をお願いしました。

東京支部発足当時は、毎年会員が増大し、各期評議員の要請に応じて、全て配布してしまったのではないかと考えられますが、お恥ずかしいしだいでした。

お願いに応じて、早速第53期（昭和26年卒）佐々木順一氏からご寄贈いただきました。ほんとうにありがとうございました。紙上を借りてお礼申し上げます。

爾後手放さぬよう厳重保管いたします。

長谷川四郎（第28期大正15年卒）
シベリア物語の作者
多彩な芸術家―文学、画、劇作、評論

60期　北原　耕太郎

掴もうとする人の手の
身振りだけを
美しく後にのこして
何かがいつも通りすぎる
（僕は誰を見送りにきたのだろう）

あるとしもなく吹いている
風の方へ持ってきた花束を
僕はそっと
渡してやった

――以下略――

ふくれたお腹がひっこんで
背中にコブがくっついた
エンヤコラサ

背中にコブがくっついて
オッパイがまた倍になる
エンヤコラサ

オッパイ倍増倍の倍のバイ
マグロのアラを倍食べる
エンヤコラサ

――以下略――

いつも閉ざされている裏門の傍には、小さい古風な丸太小屋があり、その屋根の形を見ると、風見でも付けたら似合いそうに尖っていた。私はそれが何であるか長いこと知らなかったが、或る日、それが死体置場であるということを知った。だから表門から入ってきた病人が、若しも裏門から出ていくとすれば、恐らくそれは死人となって出て行くのであろう。この丸太小屋はいつも閉ざされていたが、或る日のことふと見ると、その扉が少しばかり開かれており、何気なく近寄ってみると、その薄暗い内部から白い小さな裸の足が二本、木の裸か寝台に横たわり、白く浮かび上っていた。そこは全く人気がないように静かだったが、突然、火山の爆発のように、泣き叫ぶ声が奥の方から聞えて来た。そして暫くすると、また以前よりも静かになったが、しかし私はそこに噴出はやめたが、やはり地下深く燃え続けている地軸の火を感じたのだった。

―シベリア物語「馬の微笑」より―

「長谷川四郎」どこかで聞いたことがあるかなぁ。「シベリア物語」どこかで聞いたことがある小説だ。これが私が作家名、書名を聞いたときの感想だった。

しかし、「ぼくのシベリアの伯父さん・長谷川四郎読本」（晶文社刊）を読んで、著名な文化人（文学だけではない）だったのである。同読本には、いわゆる有名な文化人が多彩に名を連らねて、それぞれ一文のエッセイを寄せている。吉田秀和、中野重治、安部公房、富岡多恵子、大江健三郎等々。

長谷川　四　郎　氏

四郎の活躍のあらまし

野間宏によると、四郎は、画家であり、詩人であり、劇作家であり、批評家であり、フランス文学者、ロシア文学者、スペイン文学者、キューバ文学者であり、酒好き酒通、話好き…etc……etc である。

これはまさに、四ケ国に精通した芸術スーパーマンである。私などは英語一つでさえ、からっきしだめなので、全くもってうらやましいことである。

これらの文学については、それぞれ翻訳、解説書を刊行している。

国内では、冒頭に抜すいした「シベリア物語」で名声を高めたわけである。シベリア捕虜収容所の体験とそこで出会った人々、そしてその人々の生活を、淡々と綴った戦争文学である。全篇通しの物語ではなく、「シルカ」「馬の微笑」など連作の短篇十一で構成されている。

読んでみると、ほんとうに淡々と書かれている。あの極寒のシベリアでの5年間の抑留生活は辛くないはずがない。しかし、寒いとか辛いとか飢えとかいう文字にお目にかからないのである。人によってはそれを悪評する人もいる。しかし、そこに四郎の「広大な」と言われる人間性があるのだと思う。

劇作家としても活躍し、翻訳、脚本、それに演出も手がけている。アンナ・カレーニナ、終盤戦、兵隊芝居などがある。

詩も冒頭に二篇の抜粋を載せた。全く趣きの違うものである。安部公房は「四郎の手にかかると、この世の全てのものが、たちまち一篇の詩と化してしまう。」と評し、久保田正文は「労働者の健康なエロチシズムへの気取らない、しかし泥くさくない、陰湿でない讃歌のようなものが汲みあげられている。」と評している。自作詩集、訳詩集とも何点も出版されている。

画は、一点掲載してみた。私は絵画は

まったく弱く、この画が上手なのか下手なのかはわからない。何かを象徴した画なのであろうか。出版目録に画集はないようである。

四郎の人となり

さて、この四郎を紹介しようと「ぼくのシベリアの伯父さん・長谷川四郎読本」を読み終えて頭をかかえてしまった。何をどう紹介してよいのかわからないのである。つかみどころというかポイントというか、その辺のところがどうしても頭に浮かんでこないのである。

そして、つかみどころがないというのは私ばかりでなく、いわゆる批評家にもいるようである。つまることろは、つかみどころのないほど「広大な人間性」を持った男ということに落着くのではなかろうか。

青木実の一文によると「茫洋たる大人」だそうであり、つぎのエピソードが書かれている。

四郎は大学卒業後、南満州鉄道大連図書館に勤務したのであるが、二人で昼休みにロシア料理店へお茶を飲みに行った。四郎はそこの亭主に「こんにちわ…。」と話しかけ、亭主もペラペラとしゃべる。四郎はうなずくばかり。後で「何と言ってたの?」と聞くと、破顔一笑その答えは「わからない。」これは、自分の覚えた言葉はまずしゃべってみるという彼の勉強法でもあったのだが、悠揚せまらぬ大人ぶりを示すものではなかろうか。

長兄の左膳・海太郎は、函中時代は乱暴者で有名で、五稜郭籠城ストライキ、退学、そしてその後のアメリカ留学と勉学の挫折、放浪、帰国後の奔放な仕事ぶりと恋愛というように、万事派手であった。

四郎は函中入学後「あの乱暴者の弟か。」と言われたそうであるが、そう言われると心情的には少々おとなしくせざる得なかったのではなかろうか。しかし、長兄に対して四郎は、好感を持っていた。そして普通に中学を卒業して立教大学へ進んだのである。

吉田秀和は、学生時代からその後ずっと友人となるわけであるが、大学の頃のことをこう書いている。「長くひなたにいたら、のどがかわいてきた。ぼくはコーヒーを飲みたくなった。長谷川は反対しなかった。彼はけっして反対しなかった。ただ、困ったことに、喫茶店に入っても、彼は水しか欲しくないのだった。」

酒通ということについては記述はないので、どういうぐあいに〝通〟であったか不明である。

川崎彰彦の文を要約するとつぎのようになる。猛烈なはしご酒で一軒の店に居座ることを好まないという噂である。ある夜、はしごをせず大衆酒場でガマンをして座ってくれていた。そしてさかんにロシア式乾杯をした。これは「何々のために乾杯」と3分おきくらいにやるのである。「何々のために」の種がなかなか尽きずかなり続いた。そのうち同席の女性の一人が微生物研究所勤務ということを知ると、四郎は「ビールスのために乾杯」とやった。酒の強さとユーモアが生きている話である。

四郎の一家と生い立ち

父は長谷川清、号は楽天という。後に改名し、淑夫、号を世民といった。佐渡相川の金座役人の家に生まれる。明治32年ユキと結婚する。

明治33年（一九〇〇）長男海太郎が生まれた。明治35年（一九〇二）に一家は函館に移住する。父 清は、佐渡新聞で多数の論説を発表していたが、函館の北海新聞主筆大久保達のすすめに応じたものである。

函館で次男潾二郎、三男濬（しゅん）四男四郎、長女玉枝と生まれる。兄弟は四人とも文学者、画家として名をなす。

四男四郎は、明治42年（一九〇九）ガンガン寺のすぐそばで生まれ育った。弥生尋常高等小学校、そして北海道庁立函館中学校へ進む。兄弟四人みな同じコースである。「何でも好きなことをやれ。ただ外国語だけは勉強しろ。」というのが、父の教育方針だった。

長兄海太郎がアメリカへ出発したのは、四郎が小学校五年の時である。

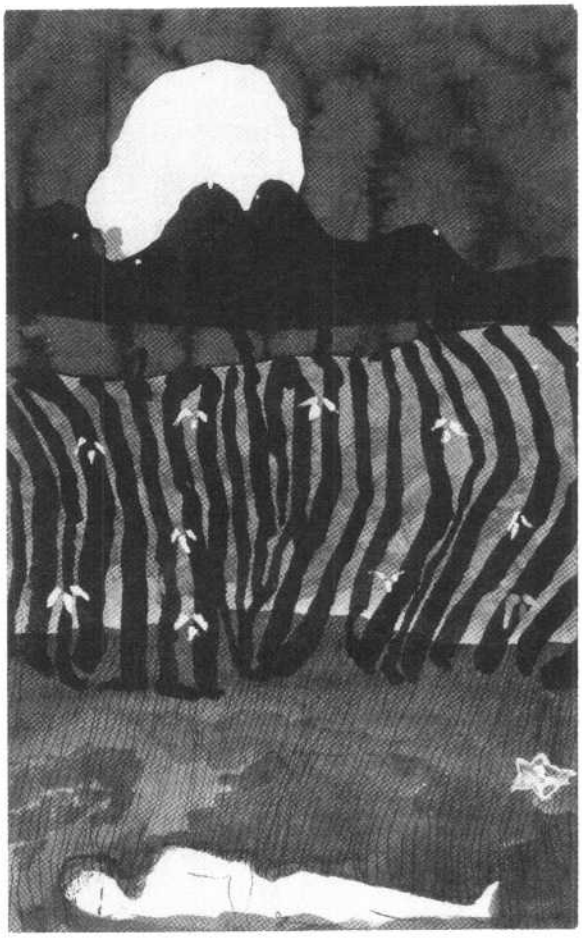
大正11年（一九二二）函館中学入学、昭和二年（一九二七）卒業した。第20期生である。海太郎のように事件も起さず順調に卒業した。

昭和三年（一九二八）立教大学予科文科に入学、ゲーテ、リルケを読み、詩作を始めた。立大時代に、リルケとヘッセの童話は全部翻訳したとの噂があったそうである。翻訳できるということは、かなり勉強をした学生ということになる。

卒業後、昭和8年（一九三三）に法政大学文学部独文科に入学11年卒業する。この間すでに、小説、詩、翻訳を雑誌に発表している。

昭和12年（一九三七）南満州鉄道（株）入社いわゆる満鉄である。5月大連に渡り図書館勤務となる。昭和25年までの外地生活の始まりである。

そして昭和14年5月中村済子（すみこ）と結婚する。この結婚はたぶん見合結婚ではなかったろうか。海太郎の奔放な恋愛結婚と違うところである。新居を北京



に構え、翌15年長男元吉が生まれる。
昭和19年（一九四四）3月召集となり、ハイラルの部隊に配属となる。

命拾い二度そして敗戦

翌20年四郎は、二度も運よく命拾いすることになる。最初は、まず当時の配属部隊は南方に転進することになったが、四郎はロシア語ができるため、満州に残される。これが〝運〟である。南方へ転進した部隊は、フィリッピンで全滅してしまうのである。

二度目は、当時ソ連と満州の国境近くの監視哨に配属されていた。8月9日奥さんが本隊へ面会に来たので戻った。その夜、ソ連軍の攻撃が始まり、監視哨の人達は全員戦死してしまう。奥さんの面会が一日早くても死、一日遅くても死であったのだ。戦争の時の人間の運は、全くわからないものだとつくづく思った。

そして8月15日の終戦。ソ連軍の捕虜となり、シベリアへ送られる昭和25年（一九五〇）舞鶴に帰還するまでの五年間の長く厳しい収容所生活を送ることになるのである。

シベリアからの帰還と活躍

昭和25年2月柔道一級でがっしりと背の高かった四郎は、やせて、歯が欠けて、眼ばかり光らせて故国の土を踏む。そして「ソ連にもいやなことがあるけれど、日本はもっと悪く、土台が腐っている。」というのが、四郎の意見であった。

兄濟二郎の杉並の家にひとまず落着いた四郎は、シベリアの抑留体験を書いた「炭抗ピス」他を発表、またデュアメルの長篇小説「バスキエ家の記録」の翻訳に着手するなど活動を開始する。

昭和26年（一九五一）近代文学4月号から「シベリア物語」連作の発表が始まる。28年法政大学社会学部専任講師となり、ドイツ語を教える。また代表作の一つ「鶴」を出版する。

その後、つぎつぎと著作を発表したり、安部公房、野間宏等と現代芸術研究会を結成したり、ドイツ、キューバへ行ったり、また演劇では翻訳、演出、制作の一人三役をやってのけたりという八面六臂の活躍が続いた。

毎日出版文化賞受賞

昭和44年（一九六九）晶文社刊「長谷川四郎作品集」全四巻が、毎日出版文化賞受賞の栄誉を受けた。前出の青木実は、近代文学誌に「シベリア物語」連作の一篇を見つけ、「これは完結したら必ず何かの賞の対象になるから、ぜひ書きあげて下さい。」と激励したという。

著作、翻訳、共同演出、全集の編集委員と活躍は続いていた四郎も、昭和62年（一九八七）4月77才でこの世を去った。

（文中敬称略）

本文の出典について

〝ぼくのシベリヤの伯父さん　長谷川四郎読本〟晶文社刊
晶文社社長中村勝哉氏（52期）のご好意により、資料として全面的に使用させていただきました。厚くお礼申しあげます。

対談〝四郎の思い出すことども〟初めて知るエピソード

長谷川四郎の函中時代の何かエピソードがないかと、同じ29期で画家として著名な田辺謙輔氏に、突然電話をさせていただき、お話しをお願いした。田辺先輩全くもってお元気で、快く応じていただき、電話対談となった。

内容は読んでのお楽しみ、おそらく今まで誰も知らない話がでてきた!!

スペースの都合上、田辺先輩を田、事務局を事と略する。

事　四郎さんについてまず思い出は？

田　うん、3年の頃からだったか、よく試験の時カンニングをしましたよ。

事　エッ本当ですか。勤勉な中学生ではなかったんですか。

田　不まじめというわけではないが、勉強する方ではなかったねぇ。教室では私が窓側から二列目、彼が三列目で机を並べたんですよ。カンニングは私が見せてもらったんではなく、四郎に見せてやったんですよ。

事　アハハ…そうですか。この話を対談に載せてもかまいませんか。

田　アハハ…かまわん、かまわん。

事　他に何かお話は。

田　うちの期（29期）の幹事は大川原雄三がやっているが、家が近かったせいもあって、大川原の方が仲が良かったかなぁ。弁当も分けあって食べたりしたもんですよ。そうだ、四郎は仇名があって「ペロ」と言うんだ。どうしていたのかわからないが、ペロ、ペロと呼んでいましたよ。

事　それは面白い話です。

田　それから作文の時間に、板垣先生にえらくほめられたことがありましたよ。

事　ああ、ジャクさんですね。

田　うん、そうそうジャクだ、ジャクだ。

事　人柄はどうでしたか。

田　彼は友情に厚い奴だった。ケンカなどしたりしない奴でしたねぇ。

事　卒業後の同級会には出席しましたか。

田　ええ、あまり出て来なかったですねえ。ずっと前に一、二度顔を出した程度かな。

事　ほんとうに机を並べた友達でないと知らない貴重なお話をありがとうございました。

田　いやいや。いくらかでも参考になりましたかな。

平成2年度東京支部会計決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越	2,060,745	総会関連費	1,630,960
総会費（172名）	1,204,000	会報関連費	772,516
年会費（844名）	1,688,000	事務費	63,855
利息	43,330	会議費	83,564
雑収入	77,000	雑費	34,230
		次年度繰越	2,487,950
計	5,073,075	計	5,073,075

各期だより

◎第34期（昭和7年卒）

昭和七年度卒業生は約二百名で、現在生き残っておるのは70名位である。

この内北海道は40名、首都圏内在住者が30名位である。首都在住者で東京銀楊会と云ふ名称をつけて年に一～二回集り旅行を計画し、実行しており、余生を有意義に送り楽しんでおる次第です。

今年も千葉県御宿町方面に一～二泊旅行をやる予定であります。

昨年秋には熱海－湯河原温泉に一泊旅行をやり、今迄知らなかった名所、寺院を見学し、大いに見聞を広めた次第です。ですが、この30名の内、健康なものは三分の一の10名位で、いつもこの10名位で行動しております。丁度まとまりもよく、楽しく交流しており、一年でも長くこの会がつゞく様に祈っております。ちなみに元気もの同期生は

大原氏、来住野氏、鈴木（良）氏、木原氏、三上氏、五十嵐氏、小林（憲）氏、村田氏、岩崎氏、竹内氏、続氏、大野氏

（伏見滋夫記）

◎第35期（昭和8年卒）

私等35期生の集りである函八会の恒例の春の会が5月24日にJR大塚駅北口の神戸屋で午後1時より開催されました。

今回は何時になく多数の16名（1名当日入院のため欠席）も参加され、遠くは奈良、新潟からもお出いただき、盛大に行われました。

最初に、昨年末逝去された村上信一氏の霊に黙祷をささげてから宴に入りました。

参加者は、皆年にも似合わず元気で、あちこちでグループを作り、昔の想出や近況などを嬉々として大声で話合っておりました。

そのうちお酒が進んでくると、遂にカラオケに進展しました。驚いたことには、学校時代歌ったこともない数人が交代で歌ったその歌声が素晴らしく、NHK日曜の「のど自慢」に出てもおかしくないと、盛んな拍手喝采をうけ、宴は大きく盛り上がりました。

このようなわけで予定時間をはるかに越え、名残り惜しく再会を約し、4時近くに閉会致しました。

（及川廣造記）

◎九昭会（第36期）

昭和九年卒業故、九昭会と名称をつけた。東京九昭会は、昭和二三年以来年一～二回開催して今日まで至っている。

昭和六二年以来西武沿線在住の有志が、中野駅前の居酒屋に毎月九日に集ってたが、平成二年より毎月九日と二一日の二回集ることにして今日に至っており、中学生に戻り談笑して若返ってる。また一ケ月置きに都内郡部の七福神巡りも夫人同伴で歩き、故事来歴を調べ足を鍛えている。その時々に沿線外の遠く御殿場より工藤君、また無欠勤の神奈川寒川より出町君、八千代市より西浜君等々が元気な姿を見せ、老年ながらさすが北の国函館育ち、酒は滅法強い、今年も六月二十二日函館九昭会に東京より夫人同伴総勢十四人函館へ行き、合同総会を湯の川に開き盛大であった。これも毎年六月下旬に行い、四～五年続いている。

然し、何分共古希に近い同期生、生きている間機会を作って、快談し、生きてる事をお互いに祝福する近頃です。

（松原竹造記）

◎十楊会のこと（第37期）

昭和十年に函中を卒業した私達は「十楊会」という同期会をもっている。函館本部、札幌支部、東京支部の組織があり、毎年全国大会を開いている。平成三年度は東京が当番となり、十月二十四日に東京駅前龍名館で総会を開催し、東京都内見物の予定となっている。家族を含めた同期生が集まることになっている。北海道からの参加者は約40名、道外からは約20名の予定である。既に古希を過ぎた往年の美少年が嬉々として参集する姿を想像して頂きたい。私達が教わった首都圏在住の恩師には、佐久間、萩原、水野、大川原、松倉の諸先生がおられる。

卒業時二一三名だった同期生の生存者は現在約半分に減っているが、残り少い人生を一と時でも一緒に楽しく過ごせることが、今の私たちの一番の幸福と思っている。昨年二月同期会記念誌「白楊ケ丘の迎想」を発刊したが、私達在学中のあらましが存分に掲載してある。ご希望の方があればお目にかけたい。

（室谷邦雄記）

第40期（昭和13年卒）

古稀を迎える頃ともなれば、同期会の案内をだしても出席するものは、せいぜい十名くらい。残りは体調を崩している。高血圧で通院中、狭心症、白内障など老人病の何か一つぐらいに付き合いのない者はないと言って良いくらいで、なんとも情けない極みです。

しかし、七十才になれば、叙勲の対象になる年なので、今年はわが期からは晴れて数名の受賞者が輩出しました。

東京支部では旧日本海事協会の副会長をされていた今井清氏が勲三等を受賞しました。今後続々と受賞者がでるものと期待しています。

反対に橋本雅一氏が去る六月に亡くなりました。彼は東京医科歯科大学から東京女子栄養大学に移り、丁度定年を迎えた時でした。彼は闘病生活の中で「世界史の中のマラリア」と言う著書を書き残されました。発行所は藤原書店ですので、関心のある方は是非御一読下さい。

（相馬正樹記）

◎第41期（昭和14年卒）

41期在京同期会12名と同伴夫人2名は5月13日・14日の一泊二日の浜名湖観光旅行を実施。

我々の中学時代には五年制であったが、四年から上級学校進学できたので、在校中の思出の一つになる修学旅行の思出がない者もある。

その意味で今回の旅行は52年振りの修学旅行となり、参加者一同本当に童心に帰って旅行を楽しむことができた。

一行は三時半新幹線で浜松到着、今回の世話役現地在住重松君の出迎えを受け宿に入り、夕刻より浜名湖の上の屋形船

にて盛大な懇親会を楽しむ。殊に暮色迫る浜名湖の入日の美しさに魅了された。約二時間の宴も名残を惜しみつゝ閉じ、一部はカラオケで二次会に流れた。

二日目は観光バスで遊覧する。方広寺・小堀遠州作と云われる庭園で名高い滝潭寺と竜ケ岩洞（リューガシホラ）と云う鍾乳洞を見物し、再び新幹線で三時過ぎ帰京した。

終った途端に次回の催促が出た。

（提明司記）

◎第42期卒業生会の歩み（昭和15年卒）

昭和40年　函館湯の川で集会。函館札幌より20名参加、安保先生が高・楊会と名付ける。

昭和53年　有志10名集まり、消息を尋ね、名簿を作成した。

昭和54年8月　第一会総会、函館万惣で開催。50名参加。

昭和55年6月　第二回総会（卒業40周年）函館万惣で、50名全員宿泊

昭和58年6月　第三回総会（還暦大会）函館で開催。参加者45名。

昭和60年9月　函中90周年記念式後湯の川一の松で、参加者35名。

昭和61年5月　第四回総会札幌グランドホテルで、参加者30名。

平成元年10月　第五回総会東京平安閣で開催、参加者38名

平成2年12月　卒業50周年記念誌「玄冥の北の一道」出版。総105頁。

第六回総会は明平成4年6月函館の湯の川グランドホテルで開催の予定。

会の現況、物故者67名、消息不明35名、現会員125名で来年は古稀を迎えます。

（菅原茂夫記）

◎第43期（昭和16年卒）

連合総合生活開発研究所長

佐々木孝男君（四三期）死去

四三期の佐々木孝男君がことし一月二十九日、白血病のため、宮城県古川市の病院で、六七才で亡くなりました。

彼は東大経済学部を卒業後労働省に入り、七年後経済企画庁に移り、四七・四八年の経済白書は彼の執筆によりました。そして審議官、調査局長、経済研究所長を歴任し、昭和55年退官しました。

その後、総同盟の経済研究所長に迎えられ、連合誕生とともに連合総合生活開発研究所長として、毎年年次報告書を発表し、また経済審議会委員をつとめるなど、日本労働界の理論的指導者として、大いに力を発揮しました。

葬儀は、三月七日、青山葬儀所で連合総合生活開発研究所と日本労働組合総連合会の合同葬として行われました。

（井筒吉彦記）

◎獅子の会（第44期・昭和17年卒）

箱館戦争も舞台になった往年のNHK大河ドラマ『若き獅子たち』の放映にあやかって、首都圏在住の44期生グループでは「獅子の会」と称する。

文芸春秋のグラビヤ「同級生交歓」に載った写真も、東京国立博物館表慶館のライオン像の前だった。その時集まったのは池田拓郎（神奈川大学教授）今井基之（トピー工業取締役）鎌田実（電通副社長）佐藤文三（東京家庭裁判所調停委員）高橋豊治（翻訳家）三上理一郎（国立相模原病院長）山田宗睦（評論家）の七人のサムライだった。

今年の獅子の会は、日付も覚えやすい四月四日に銀座の三笠会館で開いた。幹事の予想を上回って集い寄った白髪、光頭の元健児（？）は二十二名だった。来年は卒業五十周年なので、函館の同期会と合同してやろうとの話も出たが、未だ連絡の取れない仲間の〝発掘〟が急務である。

（佐藤文三記）

◎第47期（昭和20年前期卒）

例年のように東京同期会を吉田さんの世話で四月七日、ニュートーキョーで開きました。約20人と予約をしていましたが、幸いにも24名が集まり、狭い部屋で身動きできない状態でしたが、昔のおもかげをまさぐりつつ、ハイティーン時代へのタイムトンネルに乗りました。

今年は、大久保、久保田、篠崎、武田、中田、中村、中国から戻っていた堀内、白旗、湯田坂、それに函館から上京していた小林達雄の諸兄の参加もあり、にぎやかなひと時をすごしました。

昭和のはじめの人達ですから、それぞれの生き方をしてきて、戦後の貧困からはい上がった人生を経験してきた歴史を顔中にみなぎらせていました。

今回出席できなかった諸兄にも集合写真を一部送ります。名前と顔と一致しない心配もありますので、名前を記入した別紙も同封する予定です。

理屈抜きに、昔に戻ってみることで、たまに骨休みのチャンスになると思っています。

（松村豊記）

◎第48期（昭和20年後期卒）

東楊会（十六年函中入学・二十年四修で卒業した者が主として会員となっている白楊会では、48期）は、平成3年4月20日箱根千山亭萬岳楼で一泊二日の日程を組み、〝ゆっくり、ゆったり、豊かに〟開催された。幹事は、野田史郎・小坂逸郎両君で、その気の配り様は大変なもので、「あみだ」あり、（四ッ谷画伯の〝函館の風景〟の展示会13点も含め）且つ、自然の起伏を利した庭は、苔むす老い杉。陽光射す竹林。木々は若葉を彩り、老桜は今や満開。まさに本当の箱根の奥座敷と一同御満悦であった。

華よりは花に　幻よりも夢と

こゝには何もない。あるのはただ、漠然とした時のながれと、然るべき時期に咲くいくつかの花々、しばしの忘却　いつか香いだ微風　静謐は老桜の傍たわらに宿り　出湧く湯音に去年の温をたしかめん　巡る季節を木霊のみぞ知る。実に静謐なる箱根の奥座敷の一夜であった。又、大いに飲み、語った。

当日の参加者は、加納・米田両先生、積丹町長中谷文義、小野騏一、篠原　篤、篠田作衛、武田好司、橋本寛治、本庄登志彦、間山郁三、松木善三、三国文夫山科喜一、山越　巌、四ッ谷久利、渡辺崇、渡辺丞二、小坂逸郎、野田史郎、上河睦美、以上20名でした。

俳　句　五句

風薫る集う友垣箱根奥

奥箱根湯音かすかや若楓

ゆづりはの地面に浮かぶ春落葉

紅仄と芍薬の唇咲きにけり

薫風や友集い来し奥箱根

再会を約して、健康に留意しよう。

（武田好司記）

◎第51期「あずまし会」（昭和23・24年卒）

・総　会

3年4月19日　番町グリーンパレス

参加　25名

同時期、同会場というのが定着したようである。

遙々金沢大教授・田辺宗一君も駆けつけ、賑やかな会となった。

母校百周年記念の話を持ち出したが、皆の関心は専ら2年後の卒業45周年記念札幌大会にあったようである。

この1年間物故者のなかったことを喜び、全員揃って札幌大会に臨もうと誓い合って散会したが、有志は2次会、3次会と元気なところを見せた。

（三国比左男記）

◎第54期（昭和27年卒）

6月15日の夕方、案内図を片手に上野の山を歩きまわっている一団があった。「確かこのへんだけどな。」顔を上げると目の前に、「なんだここじゃないか。」

本年の同期会は、横山大観ゆかりの上野韻松亭を会場に、札幌、函館、京都、大阪からの参加者も加わり、総勢31名により何時ものことながら、只管楽しく騒々しくスタートした。

皆勤賞の毎年出席者から久々の出席者まで、話は尽きることなく、遂に会場を広小路のスナックに移して延々と続けられた。何時もはここでカラオケのマイクを握るものがいるのだが、今年は皆無。一同大満足で、来年の卒業40周年記念の同期会に想いを馳せながら家路についた。

（石澤純記）

◎第60期三三会（昭和33年卒）

毎年開催の東京三三会、今年は六月一日に錦糸町のたばこ会館墨田寮で開催された。

本年は参加42名、内女性は14名であった。今年は、しばらく参加できなかった久しぶりの顔が多かったのが特徴であった。

幹事紅谷弘一君の司会で進行され、幹事長内藤尚君のあいさつがあった。新任幹事にひっぱりだされた阿部敏行君の紹介に続き、乾杯、開宴となった。

和気あいあいではなく、和気わあわあと進められ、恒例の卒業以来初参加の3名の紹介とあいさつとなった。遠路、網走からの金子（旧姓福田）美智子さん、鎌田徳喜君と桜井豊久君の3名である。

名残りつきないなかを、時間制限により沼達賢一君の閉会の辞により幕。

二次会は、会場のすぐ近所のスナックで33名参加して、これまた盛大に開催。大勢すぎてスナックがパンクしてしまいました。

（北原耕太郎記）

◎函中三八会（第六十五期）

本年度の函中三八会は、七月六日、土曜日、午後六時三十分より、東京・新宿区四谷の〝河村〟で行われた。

この日の会合には、当初、四十人が出席予定だったが、当日急用などで三十六人（男二十五人、女十一人）で行われた。参加者の大部分は、関東地区の在住だが、函館からの特別参加も含め、仙台や岐阜、山梨などからも参加、多彩な顔触れが揃った。今回の案内状送付者は、百二十五人。近況報告をしてきた方々が三十八人おり、これらのメッセージをまとめて清書し、出席者リストと一緒に印刷して、全員に配布した。

会では、最初に、今年四月に亡くなった佐々木（旧姓・松島）知子さんに対し、全員で黙祷を捧げ、佐々木さんのご冥福をお祈りした。

続いて、出席者全員が同期生ということで、会話をすれば必ず共通点があり、話のきっかけが出来るとは思われるものの、当初、会場全体には初対面同士のような雰囲気があったため、全員に自己紹介と簡単な近況報告をお願いした。

とくに、今回は、函館から単身赴任で東京に来たことで初めて出席した桜田昌彦氏、同じく関東近県にいながら始めて出席した松林征次、武田進の両氏、以前にも出席していたが今回が久々の出席となった佐藤之彦、清水弘、野路馨各氏などがおり、自己紹介でクラス名と当時の思い出などを話すごとに、盛り上がった。今回も、卒業記念アルバムのコピーを用意。卒業当時の顔と現在の顔を比較出来るよう配慮（余計なお世話？との声もあった）したが、このコピーが好評で、ひっぱりだこだった。

今回の会場には、ピアノとカラオケも用意されて、準備が整っていたが、ほとんど見向きもされず、お互い席を代えては文化祭や恩師のこと（悪口？）、部活動、同じクラスだった友達のこと、修学旅行の思い出など、全員が高校時代に戻っての会話が続いた。

午後九時三十分、会場の関係で、終了せざるを得ず、参加者全員の記念撮影と道下勝之氏のピアノ演奏で、校歌を合唱。最後に、元応援団・中里清敏氏の発声で〝函中三八会〟への応援を行い、次回の再会を約束して閉会した。

しかし、一年振りの再会、さらに高校卒業以来始めてという人などもおり、別れがたく、約三十人が別会場に移動して二次会になった。二次会でも汲めども尽きない話に花が咲いていた。そして、午後十一時過ぎ、二次会を終了した。

（菅原大作記）

会員短信

年間費納入にご協力ありがとうございます。

払込通知票の「近況・通信欄」平成二年度分より抜すいさせていただきました。（敬称略）

（昭8卒**金子幸信**）会のお世話御苦労様です。御健康をお祈り致します。（昭8卒**佐々木孝允**）今回は墓碑建立年忌及び国際友好会ボランティア出席のため、余儀なく欠席させていただきます。（昭8卒**藪越甲平**）今年は敬老の日に区役所から祝状、金一封、祝品をいただいたが、いよいよ世間も認める老人のランクに入ったのかと、いささか寂しい気持にもなったが、「人生80年の時代だ。まだまだ若いぞ。」と思いなおして元気で頑張っております。（昭9卒**秋浜晴彦**）第36期生は毎月9・21日に中野駅前白木屋で夕刻の会合をもっています。話題は平々凡々往年の秀才も全くの臭才となり果て、好々の白頭翁の大半を占めています。（昭9卒**海老名貞雄**）小生現在旧漁業無線を退職、同老人会（全国組織）の方を手伝っております。漁業無線も国際的問題があり、難しい世界です。（昭11卒**神子田康彦**）私は函中の純然たる卒業ではないので第何期相当か不明ですが、函中38会の会員です。（昭11卒**柳沢弘の奥様**）脳梗塞羅病後2年余病床に在ります。御無沙汰ばかり致して居りますが、皆々様へよろしくお伝え下さいませ。（昭12卒**畠山務**）欠席ばかりで申訳ありません。我々の年齢になると同年輩の人は出席が少なく残念です。健康上夜の会には出席できませんが、各位の活躍をお祈り致します。（昭13年**山本安一**）元気で山を歩いています。（昭14年卒**坂井一郎**）41期の在京同期会玄冥会を通して東京友部の様子を知らされています。現在浦和家裁の調停委員をしています。（昭15卒**三束惣一**）7月13日墓参で函館へ行った折、高島先生宅をお訪ねし、久方ぶりでお会いしてきました。ご高齢にも拘らず非常にお元気なご様子で安心致しました。（昭16卒**神山茂郎・真田良人**）所用、出張のため出席できません。祈大成功。（昭17卒**勝浦寛**）会報で新校舎の建設を知り、義父が現校舎建設に関係していたので月日の流れを感じました。周囲から50才台と見られており、山岳部で培った足腰の鍛練に努めております。（昭17卒**浦田常治**）1月夢を呼ぶ海NHKラジオ第2、4月希望の泉、中学音楽2に掲載教育出版社9月みんみんぼうや、虎の門ホール童謡祭参加、9月朝日生命ホール新しい日本の歌発表会参加。（昭18卒**村上國男**）単身赴任の生活から戻りホッと一息ついたら通勤の苦労。でも生活に張りがあることに感謝しなければ。（昭20卒47期**中村秀一**）同窓会には一度も出席して居りませんが、もう少し閑職に付きましたら、ぜひ出席したいと考えております。41期荒川芳郎42期宮本寿一両先輩、同期宮本泰平氏53期越坂多嘉志氏にはいろいろと御世話になっております。（昭25卒**澤田稔**）平成元年9月第二の人生の鍼灸診療所を開所すると、当分旅に出られなくなると、即刻鈍行列車にとびのった。信州に恩師関谷先生をお訪ねし、本庄、酒田と廻り、40年ぶり懐しのふるさと函館へ。それからの2日間は旧友諸兄に会い、青春にもどっての日を堪能した。（昭27卒**佐藤堅一**）30有余年の公務員生活を終え、現在団体の役員として元気にやっております。（昭29卒**吉田孝**）大阪単身赴任3年半となり、東京での会合にはご無沙汰を重ねております。（昭29卒**菱山照千**）今年6月東京29年卒会に縁があって35年振りに参加。2年終了時に名古屋に転校したため、実に感慨深いものがありました。今後は出来得る限り参加して想い出を甦がえさせたいと思います。（昭30卒**小竹嘉子**）先日タンスの整理をしていたら校章入りの日本手ぬぐいが出てきました。しばし見とれて！そういえば2年しか在籍しなかったのに、家事をしながら校歌を口ずさんでいることに気づき、青春時代の函中は身近にあるような気分です。（昭32卒**榊次郎**）10月19日まで南アのケープタウンに出張しておりました。ワイン、シーフードが大変おいしい所です。土地付4LDKで四百五十万～五百万という住みやすい国です。（昭33卒**信太紀二**）人生50年を過ぎ達観の境地に近づくべく励んでおります。納入が遅れて申し訳ありません。（昭33卒**伊藤紀子**）白楊だより、なつかしく若返って読んでおります。父、姉、私と3人函中にお世話になりました。新校舎工事が始まったとのこと、開校百年は感激も深いことでしょう。在学時が60周年でしたので、刻の速さにびっくりしております。

（昭36卒**小林嘉則**）わが63期会は来年が30年になります。地元函館は勿論東京支部も同期会開催に向けて思案中です。（昭38卒**千葉恵寿**）JRの広域移動で転勤大井に住んで早や4年。何年たっても思い出すのは、港函館のイキの良い海の幸と新鮮な山の幸です。百周年には是非とも行こうと思っています。（昭38卒**高野晃**）種子島宇宙センターでHIロケットの打上げ、HIIロケットのエンジン開発試験に従事しています。新装なる母校に期待します。（昭40卒**新谷真秀**）白楊だより拝読し、感激いたしました。私の卒業時の担任堂高栄治先生が校長として母校に戻られたのです。会員短信に同期の懐かしい友人名を見つけ、またまた感激一入でした。種々ご苦労が多いと思いますが、会員のためによろしくお願い致します。（昭43卒**小笠原芳子**）いつも御連絡ありがとうございます。中野区の小学校に勤務しております。子供が小さい為思うように動けませんが、同窓会に参加できればと思っております。（昭48卒**松村敦子**）卒業後始めて東京白楊だよりを受けとりました。事務局の皆様に感謝いたしております。（昭50卒**宗原郁子**）勉学のためしばらく東京を離れることになりました。連絡先は函館の自宅になりますのでよろしくお願いいたします。（昭54卒**中村秀治**）東京の同期の方々皆さんお元気でしょうか？連絡が疎遠となり、ご無沙汰しております。同期会が企画されたらぜひご連絡いただきたいと思います。（昭54卒**伊藤典之**）始めて同窓会の案内をいただきました。（今まで行方不明だったとのウワサも）。つい先日まで高校生だったと思っておりましたが、今年息子が誕生しました。小生、母親、妹と函中ですので、揃って同窓会に出られたらと思っています。（昭54卒**松本由美**）いつもありがとうございます。函中の卒業生が同じ東京にいると思うと、とても心強く思います。

在京銀楊会員の小旅行

34期　大原　孫七

昭和七年函中卒（銀楊会）の在京同期生八名が「踊り子号」車中の人となったのは十月三十日（平成二年）だった。

まず小雨そぼ降る中を小田原城へ。隈なくみて腹の中へ叩き込もうという感じの五十嵐君に刺激されてか予想以上の時間をかけて城内を一巡した。小田原城として知られるようになったのは室町時代らしいが、北条氏が小田原へ入ったのは一、四九五年、以後五代九六年に亘って城郭を築き、関八州を治めたとか。現在の天守閣は小田原市制施行二十周年記念事業として昭和三五年に江戸時代の儘に復元された由。

梅、桜、つつじ、藤、紫陽花と二月から六月まで折々の花が咲き、それに因んだ行事が催されるという。恵まれた土地柄もあろうが、治者の風流心とか政治姿勢の反映でもあるのだろうか？

網元直営という「だるま」でその店自慢の海老天で昼食を済ませ、宿舎万葉荘へ向かう。

夕食時上磯町出身という女性が料理を運んで来た。「方言は出身地の証明、故郷の誇り」（淡谷のり子）であるか否かはともあれ、先方もすぐ函館弁に気づき、四方山話が弾んだ。

高尚な俳句の講義からさまざまな余興まで披露され、更に有志がホールへ場所をかえてダンスやカラオケを楽しみ、秋の夜長もなお足らぬかの有様だった。

翌日は打って変わった晴天。暖かさ、楽しさが一入身にしみるおもいだった。

大雄山駅から曹洞宗では永平寺、総持寺に次ぐ寺格という最乗寺（道了尊）へ向かう。道中の杉木立、杉並木、石の苔などのたたずまいにはカメラを向けずにいられないような風趣があった。

若い僧の撞く鐘の音に耳を傾けたり、童心に帰って天狗の大足駄にのった（穿くには大き過ぎた）り、広い寺域の各所（一部した廻れなかったが）を見学した。

昼食後更に五百羅漢寺へ足を伸ばし、自分に似た顔を探し出そうとしたが見つける前にタイムアップとなった。もう一泊か二泊、という願望が一同の胸中に去来したと思う。

印象深い、忘れ得ない催しとなったのは勿論参加者の積極的協力の賜であるが、立案、事前調査、実施のための来住野君の献身的努力を忘れてはなるまい。「近く又やろう」という声がもう挙っている。

参加者氏名（銀楊会名簿順）

五十嵐剛、伏見滋夫、来住野広明、三上茂、鈴木良平、大野寿夫、徳田　肇、大原孫七　　以　上

最近思う事

37期　畠山　務

古稀を過ぎて訃報を聞くことが多くなった。此の頃は、何かと人間は何処から来て人類の最后はどうなるのか気になる。今宇宙論人類史等々の本が次から次に出版されているのは驚くばかりである。結論だけを言うと簡単でビックバン（大爆発）にはじまった宇宙。40億年前の地球、更に35億年前に物質より誕生した生命、進化の結果数万年前に生れた新人類、そして最后は太陽の終りと共に消失する地球の運命は決っている。太陽の最后の爆発も過去に多くの星が消失し又誕生した輪廻のくりかえしの長い歴史の一つに過ぎない。科学の世界では聖書や古事記のような神による国や人類の誕生はない。最近朝日新聞の記事で田中澄江氏はある講演会で「人は何のために生れましたか。神を知るためですね。」と聞えたときに大粒の涙を落とし「そうだ神を知るために生れたのだ。」と書いている。一方、杉本苑子氏は「神仏は発達した大脳の所産に過ぎない。」と書いている。神を見つけた人も多い。

だが神仏をたしかな確信としては信じない人も多い。諸兄の御教示がほしい此の頃である。

寸　感

39期　河村　泰平

昨秋社のOB会が湯の川で催された機会に帰函し隆昌の市街を見て喜びが半分、観光都市としての皮相的な面が突出して観光客側にも責任が有るが、昔の俺達の街が今となっては懐しく、今は他界した両親達も含め懐しく思はれたことでした。正に、故里は遠くにありて思うことです。

帰途、修学旅行列車と同車でして、解放感の余りか、ステディ関係の生徒が、公認であるかの様に列車のデッキでラブシーンを展開中、車輛間往復の先生が見て見ぬフリをする。列車の中は閉鎖されてあっても社会であり、オープンなオフィシャルな場でもある。今や校内中の公認の仲だから、何をやってもいーさ。では公民としての倫理観を学校では教えないのでしょうか。二人乗の自転車が道の右左マチマチに走り住宅地区をバイクの爆音が深夜の夜空を斬り裂いて走ったり、一体どうなっているのですか。

函館日々

39期　川原　公成

大森の浜より見れば臥牛山はがねの如し雪置きにけり

宇賀の浦大寒に入り波低し浅葉かれひをしら雪の上

松倉川夕さすしほの荒荒し脚し濡らしてわたる秋鴨

七日月宵明星の下っ辺に烏賊釣舟の沖のなみのうへ

陸繋島二分けざまに見はるかすゑぞ虎子の御野立所

津軽の海真上を照れる昼の日のくがねなしつつ穂芒の上

函館にまさしく秋の澄める星海の上低き北斗七星

（39期・「あけび」同人・日本歌人クラブ会員）

〃46期（昭19卒）懇親ゴルフ会のこと〃

46期　渡辺　保二

我が46期（東京、函館）ではゴルフ愛好者による懇親ゴルフを定期的に行っている。

東京では年に4回、有志は10人を超え

る。又各々がホームコースを持っているので持ち回りで当番幹事を決めている。

幹事の役目としては1例会の案内、2スタートの予約、3組み合わせの作成、4ルールの取り決め、5集合時間、6交通の案内、7料金の調査等お願いしているが、お陰様で毎回気持ちよくゴルフが出来るのは有難い。

又何時も思うことだが同期の仲間とやるゴルフは手放しで楽しめる。毒舌三昧や珍プレー続出など何の気兼ねもなく和気あいあいの中で18ホールを楽しみ、風呂で汗を流した後19番ホール（食堂）でチョコレートの精算をし、今日の戦果を語らい、昔話しに花を咲かせながら飲むビールの味は又格別で、人生の喜びを、健康の有難さをしみじみ感じるひとときでもある。従って私はゴルフは19ホールと考へており、同期ゴルフ会のルールと思っている。

今年6月函館同期会に出席、翌日にはトラピスト修道院に近い函館シーサイドカントリークラブでの同期ゴルフコンペに参加した。久しぶりに訪れた北国は梅雨もなく空気はうまい。時恰も百花繚乱の季節、近くの丘にはすずらんの花が咲き匂い、ティーグランドから眺める新緑の函館山にふと石川啄木の「故郷の山に向いて言うことなし、故郷の山は有難きかな」と言う歌を思い出した次第です。

さて、朝からお天気は上々張り切ってスタートしたのはよいが、前夜の同期会、大門での二次会など二日酔いがたゝりスコアはメロメロお蔭でチョコレートを献上する羽目になった。又名幹事のはからいで大門のママさんが飛び入りで参加、花を添えてくれたのも楽しい思い出の一つでした。

私は昨年住まいが変わりホームコースが遠くなった為、ゴルフには朝6時に家を出ることにしている。現役を退いて早寝早起きの習慣が身についたせいか、早起きは少しも苦にならない。早朝の澄んだ空気を胸一杯に吸いながら今日のパートナーや作戦のことなどあれこれ考へるのも楽しいものである。これからも健康に留意し46期の諸兄と共にゴルフライフをエンジョイして行きたいと思っている。

最後にいつもお付き合い頂いている東京、函館の同期パートナーの皆さんに心からお礼申し上げる次第です。

今井　清氏
勲三等瑞宝章を受賞
（四十期・昭和十三年卒）

平成三年春の叙勲で白楊ケ丘同窓会会員の今井　清氏（昭和十三年卒、浦市在住）に勲三等瑞宝章が授与された。

同氏は（財）日本海事協会に約四十年間勤務し、船舶の検査を通じて船舶の安全性に貢献するとともに、わが国造船業ならびに海運業の発展に尽力したことが今回の受賞となったものと思われる。

同氏は、昭和十九年に東京帝国大学第一工学部を卒業し、海運工廠勤務の後、日本海事協会に機関部技師として入り昭和五十六年から五十九年まで同隊の副会長を勤めた。この間、官の要請により運輸技術審議会等の専門委員を勤めた。また、日本舶用機関学会の会長をも勤めた。

今回、同氏に受賞に際しての感想をうかがった。同氏は受賞の喜びを次のように語った。

「私は、この度図らずも叙勲の光栄に浴しました。去る五月十四日運輸省で大臣から勲記、勲章を戴きバスで他の受賞者と共に皇居に参りましたが当日は快晴に恵まれ、皇居の松の緑も一層濃く感ぜられました。宮殿は簡素な中にも気品のある和風の作りで長和殿の春秋の間において陛下のお言葉を頂戴いたし感激いたしました。私共が函中に在学した頃は日支事変の真っ最中でした。学友は卒業後それぞれの選んだ道に進みましたが、その後に続く第二次大戦で多くの友が戦死し、また戦後から現在まで親しい学友の何人かが亡くなっております。私は幸い健康で今日に至りましたが、この度の栄誉を受けることができご厚誼を頂いた先輩や友人に感謝している次第です。今後も同窓の先輩の方々、同期の諸兄の変わらないご友誼をお願いいたします。」

（相馬正樹記）

"第15回親睦大会"

・と　き　平成3年10月8日（火）　午後5時より
　講　演　**激動の世界と日本経済**　午後5時～6時
　講　師　山村昭七郎氏（48期）
　懇親会　午後6時～9時
・ところ　東京青山会館　地下鉄表参道駅下車徒歩5分
・会　費　7.000円（当日ご持参下さい）

"活力ある集い"にご参加をお待ちします。講演は、副題「加速、巡航、落し穴」です。時流に合った有益なお話しが伺えると思います。

編集後記

熱帯夜連続の暑すぎる7月でフウフウ言っていたら、異常に涼しい8月とおかしな夏でした。

皆様お元気でお過ごしでしょうか。

第14号をお届けできました。

学校関係各位、会員および先輩各位のご助力の賜物と厚くお礼申しあげます。

先輩の紹介は、今号は長谷川四郎さんといたしました。活躍範囲が広くて、紹介しきれない感じがいたします。ある先輩の発案により架電したところ、四郎さん同期、田辺謙輔氏の同期生ならではの面白いお話を伺うことができました。

「東京白楊だより」は、次号で15号となります。ご意見、ご希望を支部事務所へお寄せいただければ幸いです。

来る10月8日（火）の大会への出席をお待ちしております。

（KK）

発　行　白楊ケ丘同窓会東京支部
編集責任者　北　原　耕太郎
支部事務所
〒一六〇　新宿区新宿一－一四－六（御苑ビル）
スペース販売㈱内
TEL（三三五二）六二八一